四季彩り

～伝統から未来へ～
無形資産について考える

元京都工芸繊維大客員教授
加納　剛太

京都に息づくアイデンティティーは、古来人々が受け継いできた伝統から革新を生み出すDNAが関与しているのではないか。同時に、これは京都のみならず、伝統と革新を特徴とする日本社会全体がもつDNAであり、目には見えないが貴重な「日本の無形資産」でもある。この無形資産をテーマに、日本の高齢化社会という視点から「日本の失われた40年」を考察し、今話題のAI（人工知能）についても考えてみたい。

現在、京都市内で私が暮らしているシニア向けの分譲マンションには60～90代の153世帯が暮らしている。この年齢分布は日本の高齢者の構成比とほぼ同じであり、まさに日本の高齢社会の典型的な縮図と呼べる集団である。

最近、このマンションの管理組合の理事長を務めて感じたのだが、住民の多くは、現役時代に企業経営、教育、医療、法律、商業などを通じ、日本の戦後経済の発展を支えてこられた方々であり、多様な経験と深い知識に基づくプライドや高い見識を身につけておられる。このような方々と共通の課題について議論するたびに、日ごろの生活からは想像もできないほど活発な意見が飛び交うことに驚かされる。この方たちの中に燃え尽きることのないエネルギーがいまも残っているということではないだろうか。一方、日本はバブル崩壊から40年間、十分な成長ができなかったという現状がある。60歳定年、あるいは専業主婦という社会システムの中で、現役リタイアを余儀なくされた方々が持つエネルギーの無形資産を国がもっと活用できなかったのかと考えさせられる。

さて、今話題の対話型AI「チャットGPT」といった生成AIについて、どの程度人間生活を脅かすのか、半導体チップの進化という私の専門の視点から検証してみたい。趣味である囲碁とAIの進化を例に考えてみた。

2016年に米グーグル傘下のディープマインド社が開発したAI搭載の囲碁ソフト「アルファ碁」が人類に初めて勝った。奈良時代に日本に伝わり、千年以上の歴史をもつ囲碁も、無形資産の塊として日本の伝統の中に生きている。アルファ碁が人間に勝ったというニュースは確かに驚異であったが、学会での報告によると、この勝負で消費した電力はAIが150ジュールだったのに対し、人間は20ワットで、AIの使用したエネルギーが1万倍程度も大きいということだ。人間の脳が効率的であることが図らずも証明された。これもまた千年を超える歴史と伝統で積み上がった無形資産の一つだと言えよう。

生成AIという言葉が使われ始めてまだ1年もたたない。AIに求められるのは、生み出す力、生成力と創り出す力、創造力であろうか。もともと人間が創造した知性、歴史と経験と伝統で蓄積した知見、そして、将来生み出されるであろう知見を半導体チップの力を借りて学習していくAIは、人間生活の生産性向上に貢献することはあっても、人間の創造力を脅かすなどということはあり得ないように思えてならない。